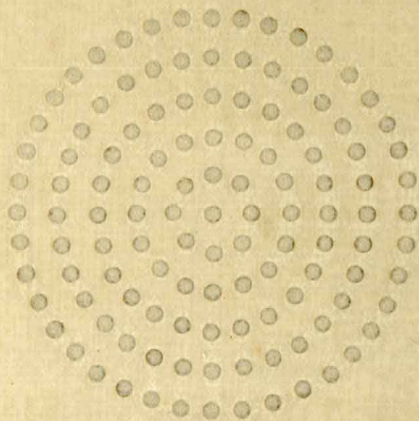
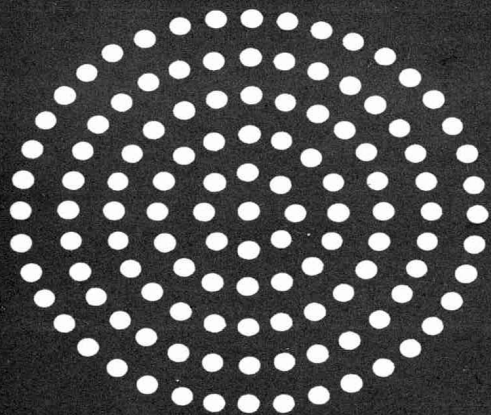




世界の詩集 3

ハイネ詩集



井上正蔵訳

井上正蔵

東京に生まれ、1935年東京大学独文科
現在、東京都立大学教授。

「ハインリヒ・ハイネ」(岩波新書)。
「序説」(未来社)。「ドイツ近代文学
三一書房」)。翻訳「ハイネ「歌の本」
庫」。「アッタ・トロル」(岩波文庫)。
「冬物語」(筑摩書房)その他。



世界の詩集

3

ハイネ詩集

印刷カラー 晝美術印刷株式会社

文晝印刷株式会社

晝美術印刷株式会社

三真堂印刷紙器株式会社

株式会社 鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

昭和四十二年二月十日 初版発行
昭和五十四年十月五日 二十二版発行

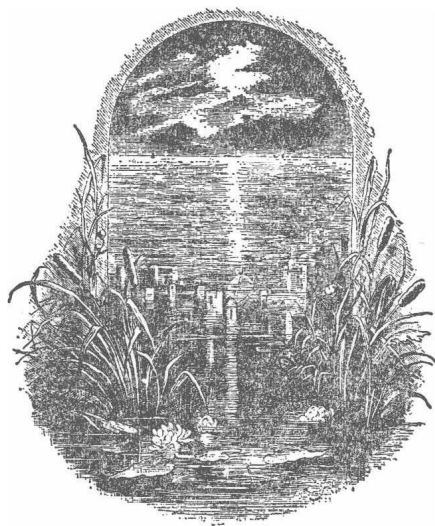
訳者 井上正蔵

発行者 角川春樹

発行所 角川書店

東京都千代田区富士見二丁目十三番
電話東京三十一九五二〇八〇(一〇二三)
電報東京三二七二二(大代表)

目次



あなたの青い目で

ローレライ

星がひとつ

告白

歌のつばさ

春の夜に

ちいさい瞳は

夜の船室にて

愛のあいさつ

泣きたいのだ

朝めざめては

ちいさな赤いくちびるに

つぼみひらく

なみだより

たそがれの薄明

やまやまも城も

おれは不幸なアトラスだ

おもえば くらい生活に

春の日は

平和

花さながらの

春

セ

ハ

二〇

三

四

六

七

八

四

六

六

元

三

三

三

四

五

三

六

四

四

四

ぼくのおっきな悩みから

恋びとと別れてからは

海へのあいさつ

漁師の家のそばに

くろい上着

山の上まで

羊飼いの子

イルゼ川

ばら ゆり はと

五月がおとずれた

むかしの夢を

わが胸に凍み入るは

きたぐにの

秋風に

雨風ほえる

そとには雪が

夜は しずか

かれらはぼくを

ものがなしい十一月

バガニーニには いつも

宿へかえって

たがいに惚れて

哭

哭

哭

三

四

五

六

六

七

七

七

七

六

六

七

七

七

七

七

七

七

七

はじめて会ったそのときに
 はじめて恋をするものは
 ぼくの歌には
 わが母 B・ハイネに
 バリとの別れ
 ハールブルクから
 海の風
 入日のなごり
 風がズボンに
 きれいな漁師の娘さん
 難破者
 海のまぼろし
 海の精のうた
 嵐がダンスの
 落日
 はまべの夜
 頌歌
 擲弾兵
 この岩の上に
 神聖な寓話を
 教義
 警告

壺 おお 生活を
 壺 世のならい
 壺 傾向
 壺 人生航路
 允 ルンペン根性
 二三 まあ待て
 二六 友よ 避けたまえ
 二六 追憶
 二〇 あれこれ言いあい
 二二 じっさいには
 二三 もしもおまえが
 二五 幸福は
 二〇 ぼくは天国を信じない
 二五 おもえばこの目は
 二五 だれでも自殺したもの
 二六 そうなりやおまえ
 二五 惚れたふりして
 二五 ええ じれったい
 二六 ドウカーテン金貨のうた
 二五 ダイヤモンドや真珠やら
 二五 おまえのかわいいその頬に
 二五 うるわしい わが悩みの揺籃

一四 一四 一五 一五 一六 一六 一七 一七 一八 一八 一九 一九 二〇 二〇 二一 二一 二二 二二 二三 二三 二四 二四 二五 二五 二六 二六 二七 二七

夢で かなしげに
 あなたがそばを
 好かれていと
 逃げていっしょに
 わかれには
 ぼくは心を
 ペルシャザル王
 舞妓ボマーレ
 わたしは夢で
 女
 ぼくは笑ってやる
 天使
 天国の楽土にも
 夜の舟行
 受難の花

解説

ハイネ・人と作品
 鑑賞
 年譜

これぞむかしの	一三
蓮の花	一三
ばらと糸杉と	一四
火刑	一五
かっぱらいの夫婦	一六
ぼくが女を目を	一七
家庭円満のために	一八
ばかなまねは	一九
傷ついた騎士	二〇
どうしようというんだらう	二一
ある若者が	二二
頬に頬よせ	二三
なぜ ああ ばらは	二四
すぎし日のまぼろしが	二五
夜のおもい	二六

二五
 二六
 二七

ハイネ詩集



あなたの青い目で

あなたの青い目で
愛らしく見つめられると
ぼくはもううっとりとして
ものが言えない

あなたの青い目を
どこへ行っても思い出す
青い思いの大海おたつみが
ぼくの心にみなぎっている

ローレライ

どうしてこんなに悲しいのか
わたしはわけがわからない
遠いむかしの語りぐさ
胸からいつも離れない

風はつめたく暗くなり
しずかに流れるライン河
しずむ夕陽にあかあかと
山のいただき照り映えて

かなたの岩にえもいえぬ
きれいな乙女が腰おろし
金のかざりをかがやかせ
黄金の髪を梳いている

黄金の櫛で梳きながら
乙女は歌をくちずさむ
その旋律はすばらしい
ふしぎな力をただよわす

小舟をあやつる舟人は
心をたちまち乱されて
流れの暗礁も目に入らず
ただ上ばかり仰ぎみる

ついには舟も舟人も
波に吞まれてしまうだろう
それこそ妖しく歌うたう
ローレライの魔のしわざ

星がひとつ

星がひとつ

きらめく空からおちる

ほら おちるのが見える

あれこそは恋の星

花や葉が ばらばら

りんこの木からおちる

いたずらものの風がきて

たわむれたり もてあそんだり

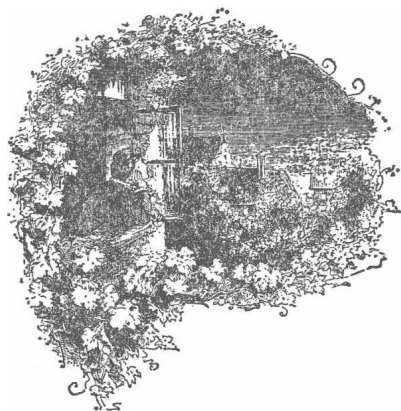
池のなかを白鳥が

歌をうたってこぎまわる

声はおとろえひくくなり

みずの墓場にしずんでいく

このしめやかさ このうすぐらさ
花や葉はとび去り
星はくだけちり
白鳥の歌はとだえた



告白

夕闇が迫るにつれて

波はいよいよ荒れ狂う

ぼくは渚にすわって

白い波が踊るのを見ていた

ぼくの胸も海のようにわき立ち

せつない郷愁に駆られる

おお あなたよ いとしいひとよ

あなたの姿はどこにでも浮かび

どこでも ぼくを呼ぶ

どこにでも どこでも

風のさわめきに 海のひびきに

そして ぼくの胸の吐息に

細い蘆でぼくは砂にしるした

「アグネス あなたを愛す」

だが いじわるな波が流れてきて
この甘い告白の文字をひたし
あとかたもなく消し去った

蘆よ 砂よ 波よ もろくも砕け
散るものよ なんとはいはかなさ

空はますます暗く 心はいよいよはやる
いま ぼくは手に力をこめ

ノルウェーの森のいちばん高い縦を引きぬき
エトナの山の煮えたぎる

火口にそれを浸し

火をふくむ巨大な筆にして
暗い空のおもてに書こう

「アグネス あなたを愛す」

そうすれば 不滅の火の文字は
夜ごと大空にかがやくのだ
未来の世のひとびとが歓呼して
空のこの文字を読むだろう

「アグネス あなたを愛す」

歌のつばさ

歌のつばさのうえにのり
いっしょに行こう恋びとよ
ガンジス河の草原くさはらに
ふたりの憩う場所がある

しずかに月ののぼるとき
あかく咲きでる花の園そと
池にただよう蓮はちすらは
いとしきみを待っている

すみれは たがいにほほえんで
星をあおいで語りあう
ぼらは たがいにむつまじく
あまい話に頼よせる